

はじめに

布留遺跡の発掘調査の歴史は古く、天理高等女学校のプール建設に際して、偶然、土器などの遺物が出土したため、末永雅雄・小林行雄・中村春壽によって1938年に実施されたのが最初である。その後、今日まで布留遺跡では35次に及ぶ調査が実施されてきた。

しかし、2022年度末に長年布留遺跡の調査を行ってきた埋蔵文化財天理教調査団が解散し、すべての資料が天理参考館に移管されたので、当館ではみな様の布留遺跡を知る一助となることを願い、これまでの調査で明らかとなった成果をここに掲載することとした。

布留遺跡の調査体制の変遷は次のとおりである。

布留遺跡で最初に調査が行われた後、1953年に遺跡の東辺部における都市計画道路の建設やその西側の地域での大がかりな開発を契機として、3年にわたる調査が天理参考館により実施された。

1971年には布留遺跡周辺の大規模開発が相次ぎ、事前の発掘調査が必要とされることが多くなるとともに、文化財の保護も急務となってきたため埋蔵文化財天理教調査団の前身である布留遺跡発掘調査団が組織され、天理参考館員3名が調査に当たった。さらに、調査件数の増加に伴い1976年には調査団の名称を布留遺跡天理教発掘調査団と改め、調査員も5名に増員し調査体制が整えられた。翌年にはプレハブ2階建ての調査団棟も完成した。

この年には布留遺跡の広がりや性格等について究明することが急務となり、天理市教育委員会により3か年計画で布留遺跡の範囲確認調査が実施された。調査に際しては布留遺跡範囲確認調査委員会が組織され、当館に協力要請があったため、天理参考館ではこれに全面的に協力することとなり、発掘調査に当たることとなった。この3年にわたる調査により、遺跡の範囲や存続年代など数々の重要な事実が明らかとなった。

1979年、さらなる発掘調査面積の拡大や事務的な仕事の増加に対応できなくなってきたため、調査団の組織を改めることとなり、布留遺跡天理教調査団を天理教表統領室に直属させ、事務所を表統領室内に置くことになった。同年12月には各種研究室、工作室、写真撮影室、事務室、収蔵庫を備えた鉄筋3階建ての調査団棟（天理市永原町）に移転した。

1981年には布留遺跡以外の遺跡にも対応できるようにするため、布留遺跡の名称を除いて、埋蔵文化財天理教調査団と改められた。

しかし、50年以上にわたる調査団の活動も2022年度をもって終えることとなり、すべての資料が天理参考館に移管された。

## 布留遺跡

布留遺跡は奈良盆地東辺の中央に位置する。遺跡は天理教教会本部付近を中心に東西2km、南北1.5kmに及ぶ広がりを示し、布留川北岸に形成された扇状地及び南岸の段丘上に位置する。

布留遺跡での本格的な発掘調査は、1938年に実施された末永雅雄・小林行雄などによる布留(堂垣内)地区のものが最初である。この時の調査で出土した一群の土器は「布留式土器」の名が与えられ、以後古墳時代前期の土器型式名として重要な位置を占めている。また、これより東約150mの地点で翌年に行われた調査では、多数の縄文土器が出土し天理遺跡として報告された。この時出土した土器は「天理式」と命名され縄文時代の土器編年を考える上での基準資料となった。布留遺跡は学史上でも重要な遺跡である。

1976年から3ヶ年にわたって行われた布留遺跡範囲確認調査では、遺跡の範囲や存続時期が旧石器時代から近世さらには現代へ続くことなどが明らかにされた。

布留遺跡の出土遺物で最も古いものは後期旧石器時代のナイフ形石器である。次に生活の痕跡が見つかるのは縄文時代早期のことで、豊井(打破り)地区からは土坑が多数発見された。縄文時代中期末から後期には布留(堂垣内)地区で竪穴建物などが見つっている。さらに晩期には三島(木寺)地区で堅果類の貯蔵穴が複数発見された。

弥生時代には杣之内(大東)地区で木棺墓が、三島(里中)地区では石槨など中期の遺物が出土している。後期になると豊田(ケヤキ)地区、豊井(打破り)地区、布留(堂垣内)地区、杣之内(北池)地区、杣之内(大東)地区などに集落が出現し、その居住域を拡張している。

布留遺跡が最も栄えたのは古墳時代中・後期の頃である。布留川南岸地域では首長の居館や大型倉庫が出現し、大溝が掘削されるなど大きな変革があった。付近には石上神宮が鎮座し物部氏との関わりが注目される。この地域からは、飛鳥・奈良時代の軒丸瓦や奈良三彩の壺などが出土し、引き続き重要な地域であったことが分かる。

中世になると豊井(打破り)地区で一辺40m程の方形の居館跡が発見され、地域を勢力下においていた豊田氏との関係が推測されている。

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

### 目 次

#### 第一章 布留遺跡の概要

- 1) 布留遺跡の位置と環境
  1. 地理的環境
    - (1) 天理市の概要
    - (2) 地勢
    - (3) 布留遺跡の位置
  2. 歴史的環境
    - (1) 北部の遺跡
    - (2) 西部の遺跡
    - (3) 南部の遺跡
- 2) 布留遺跡の地形
  1. 旧地形
  2. 布留川北北流
  3. 布留川北岸の自然流路(縄文時代～古墳時代)
  4. 布留川南岸の水路
  5. 布留遺跡内での活動範囲
- 3) 布留遺跡発掘調査のあゆみ
  1. 調査区の設定
  2. 調査成果

#### 第二章 布留遺跡各地区の調査成果

- 1) 布留(堂垣内)地区(1938)(第1次)
- 2) 布留(堂垣内)地区(1954)(第3次)
- 3) 布留(アラケ)地区(第4次)
- 4) 布留遺跡範囲確認調査(第11次)
- 5) 布留(西小路)地区(第12次)
- 6) 三島(里中)地区(第15次)
- 7) 守目堂(ツルクビ)地区(第16次)
- 8) 布留(堂垣内)地区(1983～85)(第17次)
- 9) 豊井(宇久保)地区(第19次)
- 10) 三島(木寺)地区(第22次)
- 11) 杣之内(赤坂)地区(第23次)
- 12) 杣之内(北池)地区(第24次)

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

- 13) 杣之内(樋ノ下・ドウドウ)地区(第27次)
- 14) 豊井(打破り)地区(第29次)
- 15) 杣之内(大東)地区(第32次)

## 第三章 布留遺跡周辺の遺跡

- 1) 別所ツルベ遺跡
- 2) 西山古墳
- 3) 西乗鞍古墳
- 4) 小墓古墳
- 5) 東乗鞍古墳
- 6) ウワナリ塚古墳
- 7) 石上大塚古墳
- 8) 別所大塚古墳
- 9) ハミ塚古墳
- 10) 塚穴山古墳
- 11) 峯塚古墳
- 12) 杣之内火葬墓
- 13) 石上神宮
- 14) 内山永久寺

\*本HPの執筆は一章を池田保信(元埋蔵文化財天理教調査団)、二章を日野宏(元天理参考館)、三章1～7を松田真一(天理参考館特別顧問)、8～14を日野が執筆を行った。なお、一章は池田保信ほか2020「大和布留遺跡における歴史的景観の復元」『研究紀要』第24集(公益財団法人 由良大和古代文化研究協会)のうち、池田執筆の「Ⅰ.布留遺跡の位置と環境」、「Ⅱ.調査の概要」、「Ⅲ.地形の復元」、「Ⅳ.布留遺跡の概要」を一部改変して再掲したものである。

## 第一章 布留遺跡の概要

### 1) 布留遺跡の位置と環境

#### 1. 地理的環境

##### (1) 天理市の概要

布留遺跡は、奈良県天理市に所在する。天理市は行政上、奈良県の北部に位置し、現在は北及び東は奈良市、西北は大和郡山市、西南は磯城郡川西町・田原本町、南は桜井市、の3市2町と接している。

##### (2) 地勢

奈良県を地形的に見ると、西日本を南北に分割する中央構造線が県のほぼ中央を東西に走り、これに沿うように吉野川が流れている。

奈良県はこの中央構造線を境に、南の吉野川河谷・吉野山山地と、北側の生駒山地・金剛山地・奈良盆地・大和高原・竜門山地・宇陀山地に大きく二分される。

人口が最も集中するのは北側の奈良盆地で、東を大和高原、西を生駒山地・金剛山地、南を竜門山地に囲まれ、北には大阪層群からなる奈良山丘陵が横たわっている。

盆地の規模は、南北約 30 km、東西約 16 kmで、面積は約 300k m<sup>2</sup>、平面形は菱形を呈している。

##### (3) 布留遺跡の位置

布留遺跡は、盆地の東麓中央部に位置し、布留川によって形成された北岸の扇状地と南岸の低位段丘上に広がっている。この布留川は、市内の河川の中では最も大きく、大和高原を発し、V字形の谷を作りながら、所々に極めて狭い小盆地を形成し、春日断層崖から盆地部へ流れ出て扇状地を作り出している。

布留川が作り出した扇状地は比較的大きなもので、現在本流は南側に片寄って深く浸食し、南岸で低位段丘を作り出している。

遺跡の規模はこの布留川を中心として、東西約 2 km、南北約 1.5 kmの範囲と想定されている。

#### 2. 歴史的環境 (図 1)

##### (1) 北部の遺跡

奈良盆地の東麓は遺跡が密集する地域で、天理市内にも多くの遺跡がある。市北部の東大寺山丘陵から奈良市にかけての櫛本地域は、古代豪族ワニ氏の本貫地があった場所とされ、和爾丘陵を中心に遺跡が所在する。

この地域で活動が顕在化するのには弥生時代に入ってからである。福ヶ谷遺跡は白川溜池南端の丘陵斜面に位置するが、弥生時代前期から中期前半の遺構が検出されている。その後、菩提仙川・檜川・高瀬川を中心に、森本窪之庄遺跡・和爾遺跡・和爾森本遺跡・長寺遺跡・東大寺山遺跡など、弥生時代中期から古墳時代の集落が営まれる。

その中で、長寺遺跡と東大寺山遺跡は弥生時代から古墳時代の変動を示す例として注目される。長寺遺跡は弥生時代中期に活動を始める遺跡で、中期末に一度途絶えるが、後期末には再び活動を始める。東大寺山遺跡は長寺遺跡の東側の東大寺山丘陵に位置し、後期に営まれた遺跡である。2つの遺跡の動向から、この地域の人びとは後期の始めに山へ移動し、後期末にまた里へ戻ったと推定され、当時の社

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

会状況が反映されていると考えられている。

また、この地域では、奈良市の山町銅鐸（外縁付鈕式）・櫛本町出土と伝えられる銅鐸（扁平鈕式）・平尾山丘陵の石上銅鐸（突線鈕1式2個）などが知られている。

古墳時代の集落は和爾の丘陵を中心に広く面的に展開する。その中で和爾遺跡の四面庇付掘立柱建物（中期）・平尾山遺跡で検出された四面庇付掘立柱建物（後期末から終末期?）・櫛本高塚遺跡で見つかった祭祀場跡（後期後半）などはこの地域を考える上で、重要な調査成果である。

この地域の奥津城としては、和爾丘陵北側の寺山古墳群と南側の東大寺山古墳群がある。寺山古墳群は後期を中心とした古墳群で、東大寺山古墳群は前期から続く古墳群である。中平銘の鉄刀が出土した東大寺山古墳（全長140m）・和爾下神社古墳（全長110m）・赤土山古墳（全長105m）・墓山古墳（全長55m）・岩屋大塚古墳（全長約76m）など前方後円墳を中心とした古墳群で、東大寺山丘陵を中心に多くの古墳が造られている。

古代に入ると、櫛本地域には願興寺を中心に、山村廃寺・塔の宮廃寺・櫛池廃寺・長寺跡・柿本寺跡・在原寺跡・石上廃寺などの寺院が建てられるようになる。また、白川溜池南側では奈良時代の僧道薬の銀製墓誌が出土している。

東大寺山丘陵の南側を東西に延びる岩屋谷から南の地域は、前述の櫛本地域とは少し様相が異なり、布留遺跡との関係が考えられる地域である。

岩屋谷の南側には平尾山丘陵を北端として、幾筋かの丘陵が西南方向に延びている。そのうちの一つで豊田山から延びる丘陵先端部に位置する別所ツルベ遺跡では、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期・中期、古墳時代前期初頭・後期の遺構・遺物が検出されている。主な遺物には、縄文時代後期の硬玉大珠1点がある。

そのほか、豊田山周辺の丘陵に所在する別所裏山遺跡や豊田山遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物や古墳が見つかった。

また、平尾山丘陵周辺では、古墳時代中期後半から後期になると、ウワナリ塚古墳（全長約110m）・石上大塚古墳（全長約107m）・別所大塚古墳（全長約125m）・別所籬子塚古墳（全長約57m）などの前方後円墳が築かれる。

布留遺跡を本貫地とした物部氏の奥津城の一つで、豊田山の南側で中期中頃の豊田狐塚古墳・終末期の豊田トンド山古墳、岩屋地域で後期末のハミ塚古墳（方墳）と、7世紀初頭まで古墳の造営が行われている。

### (2) 西部の遺跡

別所町の西側、上総町には古墳時代中期末から後期前半の前方後円墳、御墓山古墳（全長約74m）があり、周濠から円筒埴輪や盾形木製品が多数出土している。

御墓山古墳から西の前栽町には、縄文時代晩期から中世の前栽遺跡が所在し、さらにその西側には、弥生時代の拠点集落である平等坊・岩室遺跡がある。周辺には笛とみられる木製品が出土した星塚古墳をはじめ、何基かの古墳が見つかり、近辺で古墳時代の集落が営まれていたとみられる。

### (3) 南部の遺跡

一方、布留遺跡の南では、丘陵上に営まれた弥生時代後期の集落と、杣之内古墳群が広がっている。杣之内向山遺跡と隣接する杣之内古墳群（須川）地区では竪穴建物が5棟検出された。布留遺跡の北側

と同様、丘陵上で営まれた集落が存在することは注目されることである。

杣之内古墳群は、石上・豊田古墳群と同じく、物部氏の奥津城とされる古墳群である。前期の西山古墳（全長 185m）や小半坊塚古墳（消滅・全長約 85m）の後、中期後葉の西乗鞍古墳（全長 118m）まで古墳築造は途絶えるが、その後、周濠から多量の木製品が出土した小墓古墳（全長 80.5m）、東乗鞍古墳（全長約 83m）と続き、終末期には外堤の直径が約 112m にもなる塚穴山古墳（円墳・直径約 65m）や墳丘を天理砂岩で葺いた峯塚古墳（直径約 35.5m）などが築かれる。

奈良時代には海獣葡萄鏡を副葬した杣之内火葬墓も築かれており、この地域が長く物部氏の奥津城であったことを物語っている。

杣之内古墳群より南は遺跡が少ない。乙木町で古墳時代初頭の乙木・佐保庄遺跡が認められる程度である。さらに南へ行くと、竹之内銅鐸（扁平鈕 2 式）出土地がある。それより南は、ヤマト王権の奥津城とされる大和古墳群・柳本古墳群・纏向古墳群、そして纏向遺跡と続く。

## 2) 布留遺跡の地形

### 1. 旧地形

布留遺跡周辺の旧地形を知る地図で最も古いものとしては、1900 年に大日本帝国陸地測量部が作成した地図がある（図 6）。しかし、俯瞰するには良いが詳細な旧地形を見るには大まかとなる。そこで、大規模な開発が始まる直前の 1951 年に撮影された、国土地理院の航空写真（図 4）を旧地形復元の拠り所とした。縄文時代から古代にかけての長い期間の地形変化を復元することはできないが、当時の名残を残す最も古い航空写真といえる。

これに加え、南半の谷地形については金原正明が地質調査所による成果〔地質調査所 2001〕から作成した図（図 5）〔金原 2014〕を反映させ、布留川北北流（流路帯）の復元については、発掘調査の成果を用いている。

### 2. 布留川北北流

西谷眞治らによる布留川水域の水利研究（図 8）によると〔西谷ほか 1980〕、布留川北北流は扇状地扇頂の二本松で布留川から分かれ北流する。その後、北から流れ込む小河川と合流しながら扇状地の北端を西へ流れる。航空写真には、その痕跡が幅広く認められ、相当な「暴れ川」だったと考えられる。ただ、その実態は大雨などの氾濫時には広い川幅となるが、平素は、時々流れを変える「流路帯」であったとみられる。今回、図 3 に示した流路幅は発掘調査の成果から想定しているが、布留川北北流周辺は中世まで広く湿地帯で、耕作には適していなかったことが窺われる。

布留川北北流に関わる調査成果には、①第 19 次：豊井（宇久保）地区で検出された自然流路（縄文時代から中世までの遺物を含む）、②調査区全域が氾濫原に含まれる第 20 次：豊田（三反田）地区（縄文時代から中世までの遺物を含む）及び第 11-28 次：豊田（ナラダ）地区—FL23c4—、③第 30 次：別所（別所）地区で検出された自然流路（縄文時代から古墳時代までの遺物を含む）がある。航空写真ではさらに北側で川岸の痕跡を確認できるが、図 7 左上の別所町では埋没した袋塚古墳（前方後円墳・推定長 55～60m）が見つかっており、古墳時代にはこの古墳の南側を流れていたことが分かる。

この布留川北北流は湿地も含めた範囲が、中世までの間、南の扇状地と北の丘陵を限ることとなり、周辺での人びとの活動を大きく規制していたことは想像に難くない。

また、交通の面でも影響は大きく、箸墓古墳から北へ延びる上ッ道は市内の乙木町で痕跡が途切れる

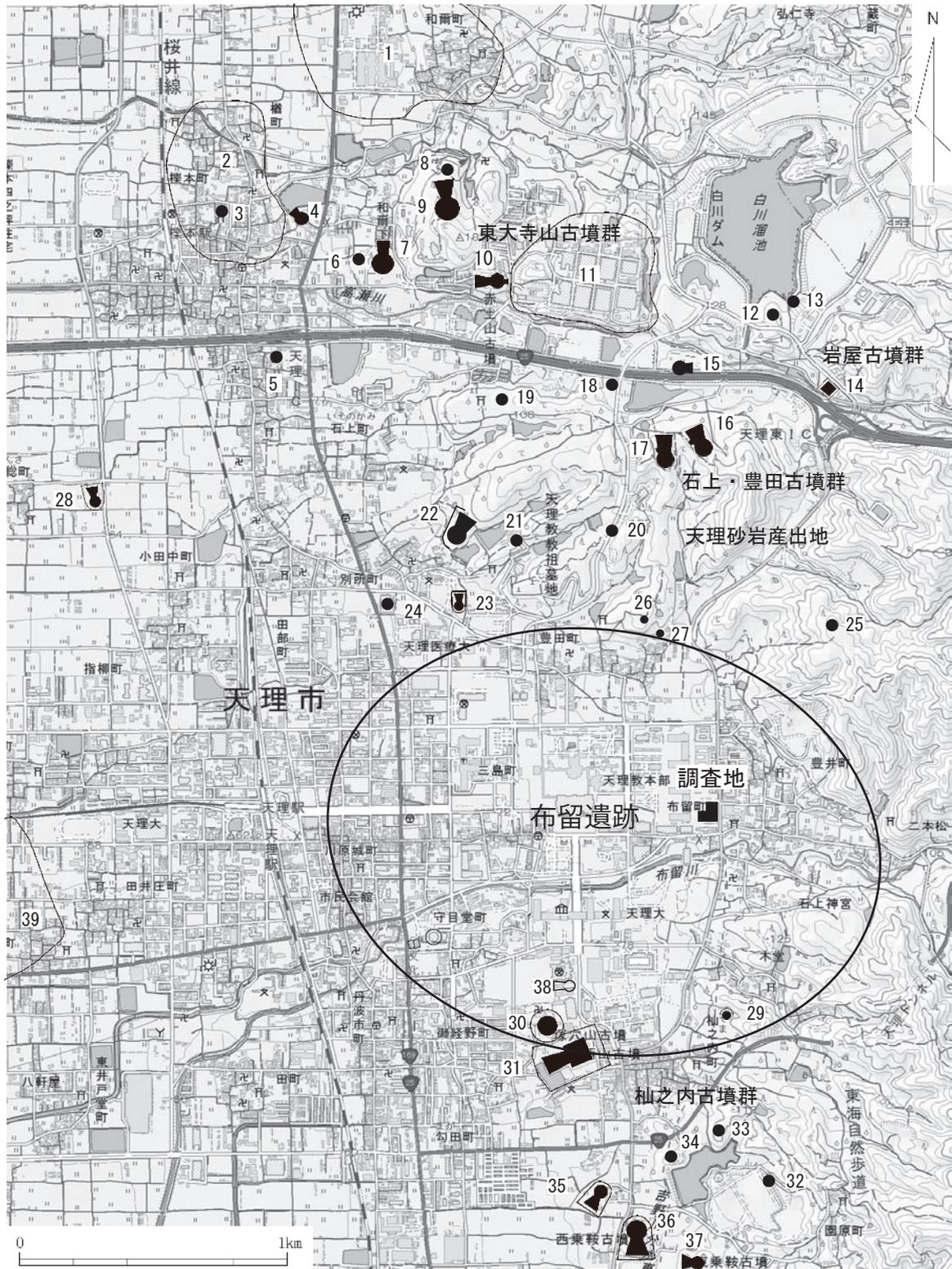


図1 布留遺跡および周辺の遺跡

1. 和爾森本遺跡 2. 長寺遺跡 3. 長寺跡 4. 墓山古墳 5. 在原寺跡 6. 柿本寺跡 7. 和爾下神社古墳 8. 櫟本高塚遺跡 9. 東大寺山古墳 10. 赤土山古墳 11. 東大寺山遺跡 12. 僧道薬墓 13. 福ヶ谷遺跡 14. ハミ塚古墳 15. 岩屋大塚古墳 16. 石上大塚古墳 17. ウワナリ塚古墳 18. 平尾山遺跡 19. 石上銅鐸出土地 20. 豊田山遺跡 21. 別所裏山遺跡 22. 別所大塚古墳 23. 別所鐘子塚古墳 24. 別所ツルベ遺跡 25. 豊田山城跡 26. 豊田トンド山古墳 27. 豊田狐塚古墳 28. 御墓山古墳 29. 峯塚古墳 30. 塚穴山古墳 31. 西山古墳 32. 杣之内火葬墓 33. 杣之内向山遺跡 34. 杣之内古墳群須川地区 35. 小墓古墳 36. 西乗鞍古墳 37. 東乗鞍古墳 38. 小半坊塚古墳 39. 前栽遺跡

が、北には、布留川や布留川北北流があり、それほど北へ延びてはいなかったとみられる。江戸時代になると上ッ道に重なるように上街道が奈良まで整備されるが、布留川北北流と合流する地点で西へ迂回するように曲がり、その後、北へ延びている。布留川北北流の影響が考えられる。

このように、古代において、布留川の扇状地や南の纏向方面から北への移動は、布留川北北流が大きな壁となり、交通の面でも大きな影響を与えていた。

### 3. 布留川北岸の自然流路（縄文時代～古墳時代）

布留川北岸の扇状地中央には、現在、布留川から分流する三島川（現在は暗渠となって、天理本通り商店街を流れる）と三島川からさらに分流する小さな流路がある（図8）。この小さな流路は鏡池（現在は消滅）に水を溜め、さらに西へ流れ出していた。

1999年、この鏡池を含む一帯が第31次：三島（三島神社・鏡池）地区として調査された。その結果、北側は微高地で南側は浅い谷地形であることが確認された。谷地形には布留川の支流が幾筋も流れ、北側にある支流を堰き止めて、鏡池が造られていることも分かった。

そのほかの発掘調査でも、扇状地中央で自然流路が確認されている。第17次：布留（堂垣内）地区では、縄文時代中期末から後期前半と古墳時代の自然流路が、また、第15次：三島（里中）東地区のA区（南側調査区）では弥生時代中期に埋まる自然流路が検出されている。図9～11に縄文時代・弥生時代・古墳時代の推定流路を示したが、この地域には古くから現在に至るまで自然流路が流れ、人びとの生活と結びついていたことが見て取れる。

人びとにとって、扇状地内を流れる自然流路は布留川本流とは違って扱いやすく、生活や活動の上で、重要な位置を占めていたことが分かる。

### 4. 布留川南岸の水路

布留川の南岸は東から西へ延びる低位段丘となっており、段丘上を流れる自然流路はないが、杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区では、弥生時代後期末と古墳時代中期に掘られた人工の溝が検出されている。共に北東から南西方向へ段丘を斜めに横断する溝で、大溝は杣之内（木堂方）地区でも確認されている。

検出された弥生時代後期末の溝は幅1.2～2.8m、深さ1.2～1.95mの断面V字形を呈している。集落を取り囲む環濠とみる向きもあるが、溝は段丘を直線的に延びており、水路の可能性も考えられる。この時期には布留遺跡の広い範囲で人びとが居住を始める。詳細は不明だが、この溝も、集落の展開に関連して掘られたものと考えられる。

古墳時代中期になると、弥生時代後期末の溝よりやや東側で、平行するように溝が掘られる。溝の規模は幅約15m、深さ約2mと大型なものである。溝からは奈良時代の遺物も出土しているが、古墳時代の遺物が多く、鞆羽口・鉄滓・漆入りの土器片・ガラス小玉の鋳型・移動式竈・馬歯骨など生産や活動に関わる遺物が多数出土した。大溝の東岸では工房とみられる竪穴建物が16棟、切り合った状態で検出され、その南側では総柱の大型建物3棟を含む建物群が検出されている。

この大溝は、竪穴建物を切っていることから、掘削当時は少し狭かったものと思われるが、それにしても大規模で、農業水利のほか、生産活動に利用するために掘られたことが考えられる。大溝の北側延長部分に位置する第11-12次：杣之内（木堂方ハイ上り）地区では古墳時代の溝が検出され、鉄滓・銅滓・鞆羽口片・玉類・馬歯骨・製塩土器・渡来系土器などが出土している。調査時、大溝は検出されておらず、布留川の氾濫原とされていたが、遺物は大溝から出土したものと同種であり、この調査区は大溝の上流

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

部分に当たると考えられる。大溝の引き込み場所は地形から見て、この調査区からさらに北東と想定される。

### 5. 布留遺跡内での活動範囲

詳細な内容が分かり、検討が進んだ段階で、当時の状況に合わせた地区分けが成されていくであろうが、現段階で大まかな活動範囲をイメージできるよう、調査地区に使われている町（昔の字）名で示してみる（図 15）。

まず、旧石器時代の遺物にはナイフ形石器がある。布留川北流の北側・豊田町（第 11-27 次：豊田（ケヤキ）地区）と布留川南岸の杣之内町（第 27 次：杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区）で見つがっているが、もう 1 個所、豊田町の北側丘陵、別所町の別所裏山遺跡でも見つがっている。この時期は布留遺跡を含めた広い範囲が活動範囲とみられる。

次の縄文時代早期や中・後期には、扇状地東側の丘陵裾に近い豊井町（第 29 次：豊井（打破り）地区・第 21 次：豊井（六反田）地区）や布留町北部（第 17 次：布留（堂垣内）地区）が活動の中心となり、晩期には扇状地裾の三島町西部（第 22 次：三島（木寺）地区）で活動がみられる。

弥生時代の活動は活発ではないが、中期前半に布留町（第 17 次：布留（堂垣内）地区）や三島町（第 15 次：三島（里中）東地区）の自然流路沿い、中期後半に杣之内町南部（第 32 次：杣之内（大東）地区）で活動がみられる。共に石庖丁が見つがっており、自然流路や谷地形を利用した小規模な農耕が想定される。

弥生時代末から古墳時代にかけては、広い範囲が活動範囲となる。特に、布留川北流北側の豊田町、扇状地北側の布留町南部・三島町東部・布留川南岸の布留町南部・杣之内町北部・守目堂町などで活動がみられる。

古代になると活動範囲は集約され、布留川北岸の豊井町（第 9 次：豊井（三反ヲサ）地区）や三島町東部（第 13・15 次：三島（里中）西・東地区）、布留川南岸の布留町南部（第 12 次：布留（西小路）地区）・杣之内町北側（第 27 次：杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区）・守目堂地区（第 16 次：守目堂（ツルクビ）地区）となる。

三島町北側など、調査が及んでいない場所も多いが、現状として図 14 に示した地域が、人びとの活動範囲であったと考えられる。

### 【文献】

大日本帝国陸地測量部 1900 「明治 33 年式地形図」『丹波市』『櫟本』

近江昌司 1954 『天理市布留遺跡地形実測図』

西谷眞治・太田三喜ほか 1980 「天理市布留川水域水利慣行」古代豪族勢力圏の考古学的研究討議資料 12（文部省科学研究助成一般 B）

地質調査所 2001 『地域地質研究報告桜井地域の地質』

金原正明 2014 「1. 杣之内古墳群の立地環境」『杣之内古墳群の研究』杣之内古墳群研究会

### 3) 布留遺跡発掘調査のあゆみ

#### 1. 調査区の設定

埋蔵文化財天理教調査団による布留遺跡の発掘調査は、1976 年の布留遺跡範囲確認調査で用いられ

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

た地区割りとは調査法を踏襲している(図2)。

この地区割りは、100m毎の「大地区」と10m毎の「小地区」からなる。布留遺跡の範囲を100mの方眼に区切り、東から西へA以降の大文字アルファベットを与え、南から北へは1以降の数字を与えて、大地区とする。さらにその100m四方の範囲内を、10m毎の方眼に区切り、東から西へa～jまでのアルファベットを与え、南から北へ1～10までの数字を付す。これで最小10m四方の地区が設定される。さらにこれら記号の頭に布留遺跡の頭文字「F」を付け、地区名とする。

例を挙げると、東西方向の大地区が「G」、南北方向の大地区が「19」の場合、大地区は「G19」となり、さらにその中で東西方向の小地区が「a」、南北方向の小地区が「4」であれば「G19a4」区となる。これにFを付ければ、地区名は「FG19a4」となる。

堆積層、遺構の呼称についても同様に、範囲確認調査を基としている。堆積層(Layer)には、漸次、上の層から「1～9」の番号(Number)を付す(Layer Number、略して「L.N.」)。埋土及び耕土はL.N.1とし、L.N.10は遺物を含まない層とする。局所的な堆積にはL.N.5 B、L.N.5 Cなど、後ろにアルファベットを付して細分する。

遺構(Locus)は、検出順に「11」以降の番号(Number)を付す(Locus Number、略して「L.N.」)。番号は遺構単体や主な出土遺物にも与える。例えば竪穴建物内の周溝・炉跡・柱穴・遺物など、それぞれに「L.N.」を与える。

### 2. 調査成果

#### 第1次：布留(堂垣内)地区(1938年)

旧天理高等女学校プール新設作業中に遺物が発見され、2地点で試掘(A・D地点)、3地点で採掘(B・C・D地点)が行われている(詳細な場所は不明)。その結果、A・B・D地点の地表下約2mで、敷石様の遺構が検出された。また、A地点では、東西1.15m、南北1.44mの範囲に、20cm程の自然石が不規則に敷き並べられ、すぐ上は木炭を含んだ黒土層と約10cmの灰層が堆積していた。

主な出土遺物は、A地点では少量の弥生土器・土師器・須恵器・櫛2点・滑石製の小玉が、B地点で弥生土器(櫛描文を含む)・土師器(5地点で最も多い量)・須恵器が、C地点では少量の土器が、D地点では完形の甕や壺などの土師器と須恵器が、E地点では土師器・須恵器・円盤形石製品・土製品・小玉・勾玉・砥石・碧玉石屑・鉄滓・サヌカイト片・桃核・稲などがある。

末永雅雄、小林行雄、中村春壽による調査報告において、出土した土師器の一部に「布留式」の型式名が付けられた。

本調査区は布留遺跡にとって、学史上、記念碑的な場所となった。

#### 第2次：布留(堂垣内)地区(1939年)

扇状地の高い地点(東の方向)から一、二、三、……、七トレンチと7地点の調査区が設けられた。

第一、二トレンチでは、弥生土器と土師器が、第三、四トレンチでは縄文土器が、西側の第五、六、七トレンチでは、縄文土器・弥生土器・土師器が出土している。なお、第三トレンチの西、約1mの地点で予備調査が行われ、石棒の頭部が1点出土している。

縄文時代の包含層は、第二トレンチから第七トレンチに向かうに従い厚くなっていた。出土遺物には土器のほかに、石錘・石棒・土錘・磨製石斧・石鏃がある。

ここで出土した縄文土器は10群に分けて検討され、「天理式」の名称が付けられた。時期は縄文時代

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

中期末から後期初頭で、後に中期末の土器を「天理C式」、後期初頭の土器を「天理K式」と細分された。

### 第3次：布留（堂垣内）地区（1954年）

地表下約60cmに土器を包含する約25cmの砂混じり層があり、その下で約20cmの自然石が東西3m、南北約5mの範囲に、不規則に並んだ状態で検出された。石と石の間には比較的大きな土師器があり、土器の中に白玉が入っているものもある。また、敷石の上や石と石の間から多数の円盤形石製品が出土している。遺物はほかに、土師器・須恵器・剣形石製品・有孔円板・勾玉・管玉・滑石製模造品・ガラス小玉などが出土している。

報告では自然石は「敷石住居様のもの」とされているが、東側に隣接する第17次：布留（堂垣内）地区で、この調査区に向かう、古墳時代中期の自然流路が検出されている。

この自然流路では、第3次調査区寄りの西側の肩部から土器や玉類が多数出土し、底からは礫も出土している。これらのことを勘案すると、石敷遺構は、第17次調査区から続く自然流路の底である可能性が高い。

### 第4次：布留（アラケ）地区（1955年）

1954年11月、工事の際「地表下約30cmのところに、細片となった埴輪片が群集して点在」しているのが見つかった。これを受けて翌年に周辺の発掘調査が行われ、異形の透し孔をもつ円筒埴輪10体・朝顔形埴輪約16体が出土した。

その後、残された略測図と写真を基に、置田雅昭が検討を加えた。それによると、散在する埴輪片の南側に、径15～30cmの円礫からなる礫列が、幅40～70cm、長さ7m以上、北西から南東に延びる。そして、この礫列は南側が高く、北側に傾斜する、と記す。

また、埴輪の基段が土中に埋められた様子はないが、1体分の埴輪が一群となって点在し、破片もすべて揃っていることから、他所からの持ち込みや倒壊後の移動はなかった、とする。さらに、工事以前の地形図に出土地点を重ね、西側へ舌状に突出する地形の南側に当たることを指摘する。この舌状部を古墳とみる向きもあるが、置田はこれを否定する。埴輪の性格については、滑石製模造品が共に出土することから、古墳以外での祭祀に用いられたものとし、①石列は祭壇の一部で、埴輪はその前面か周りに立て並べられた、②祭祀に用いられた埴輪が捨てられた、③埴輪製作後に仮置きされていた、のいずれかとする。出土した遺物は埴輪以外に、小型丸底壺や高杯などの土師器・有孔円板・筒形土製品・鉄製品などが、埴輪片の上や周囲から散乱して出土している。

埴輪の年代については、有孔円板や土師器から古墳時代中期前半の新しいところとする。しかし、それとは別に、埴輪片の収納箱に土師器片500点と初期須恵器片6点が混じっていたとあり、中期初頭までさかのぼる可能性を指摘している。埴輪はその後の修復により、段毎に赤と白の彩色が施され、基段が彩色されていないことが分かっている。

### 第5次：布留（三反田）地区（1955年）

第4次の布留（アラケ）地区から「南へ数十m」の地点とされ、詳細な場所は不明である。ここでは古墳時代中期の土器が、一括投棄された状態で見ついている。土器の多くは土師器高杯で、少量の須恵器を含む。また、緑泥石製の白玉も出土しており、祭祀後に投棄された場所と考えられている。第19次：豊井（宇久保）地区では、同様の土器溜まりが川岸で検出されている。この近くでも、東の第17次：

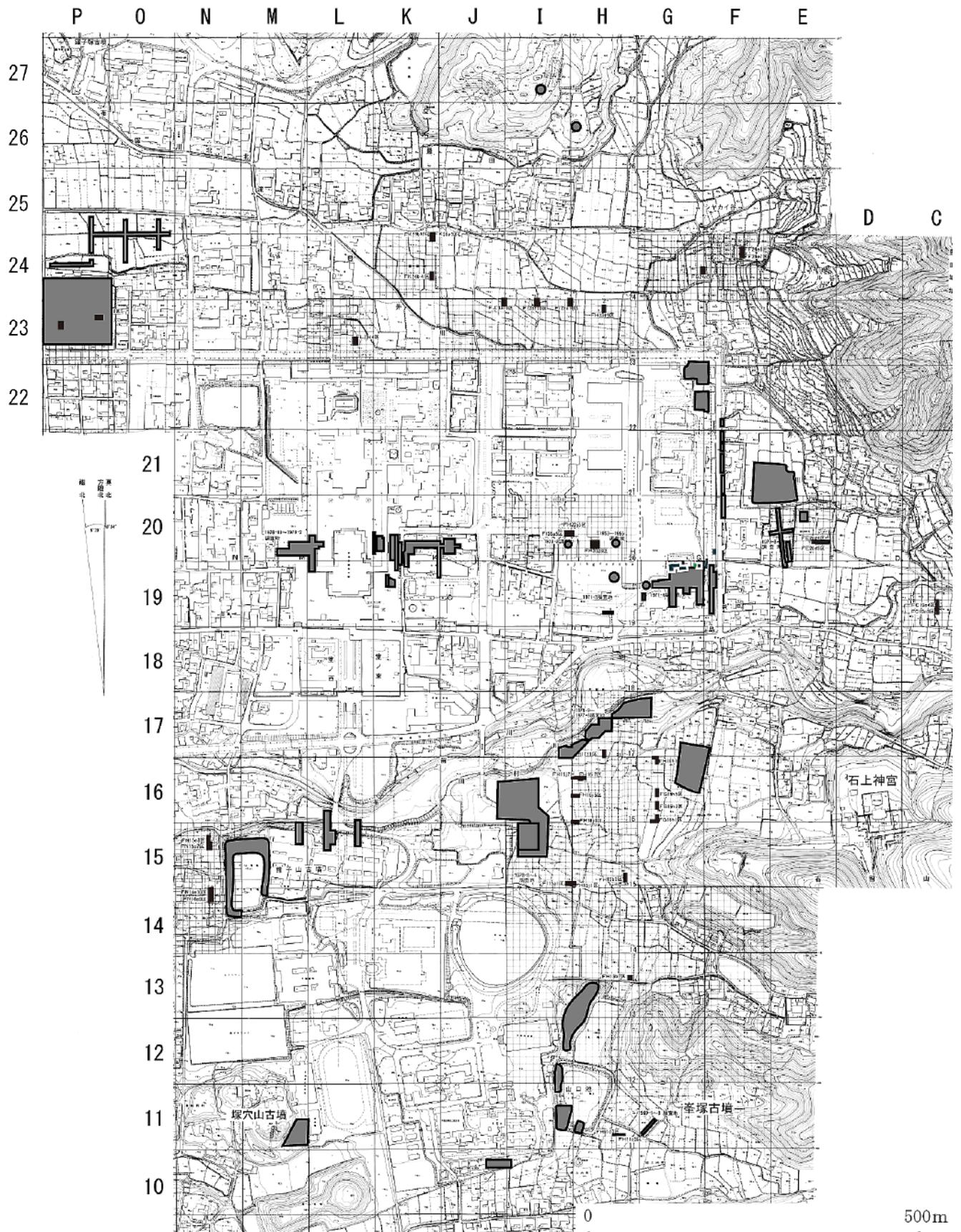


図2 布留遺跡の地区設定

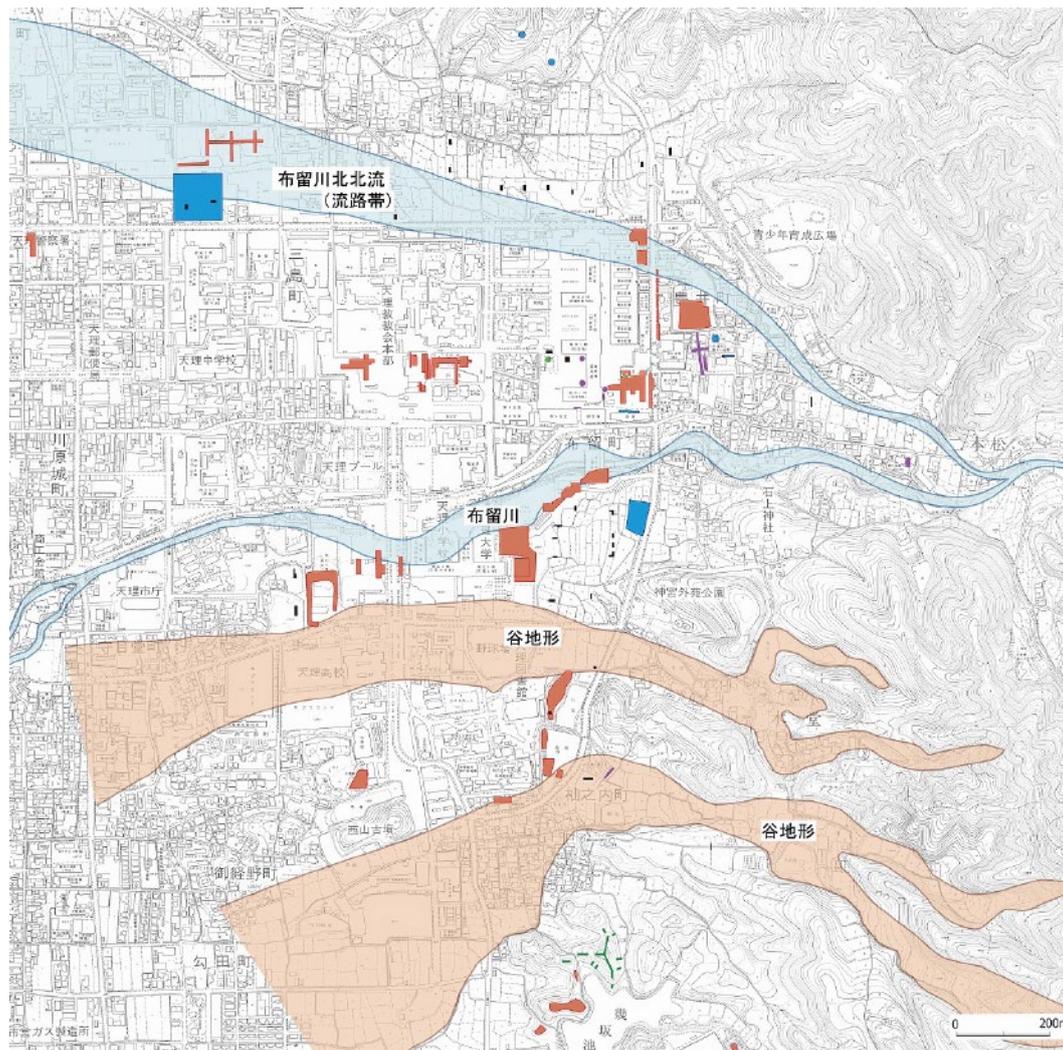


図3 布留遺跡の旧地形復元



図4 扇状地周辺の航空写真(米軍1951年撮影:国土地理院の空中写真 USA-M30-T-2-61)

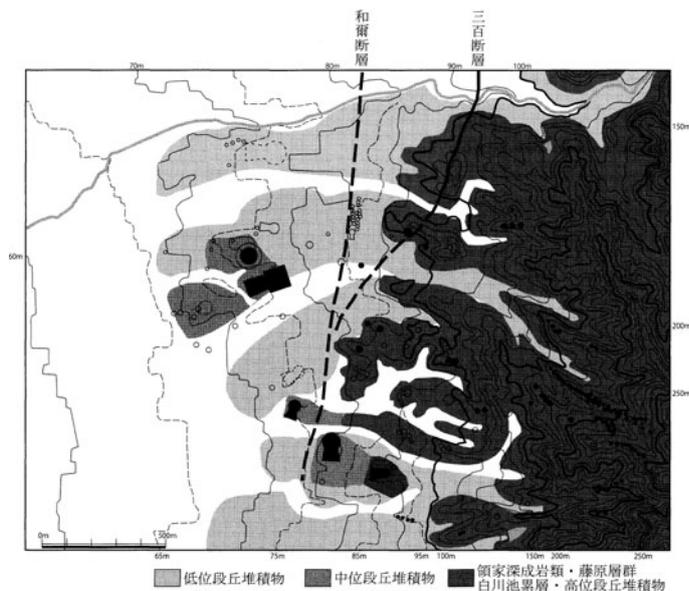


図5 杣之内古墳群周辺の地質(金原2014)

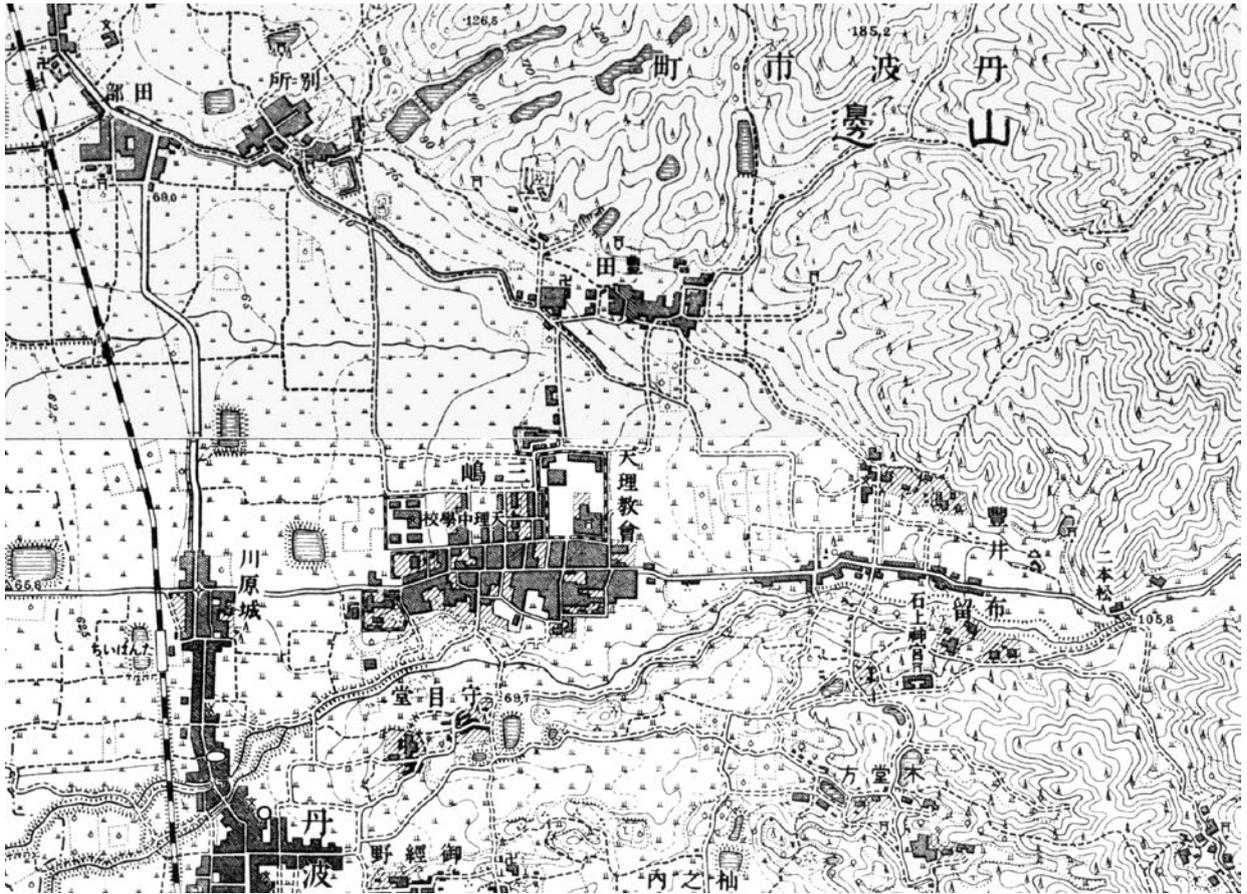


図6 明治時代の布留遺跡周辺(大日本帝国陸地測量部 1900『丹波市』『櫟本』を合成 1:20,000)

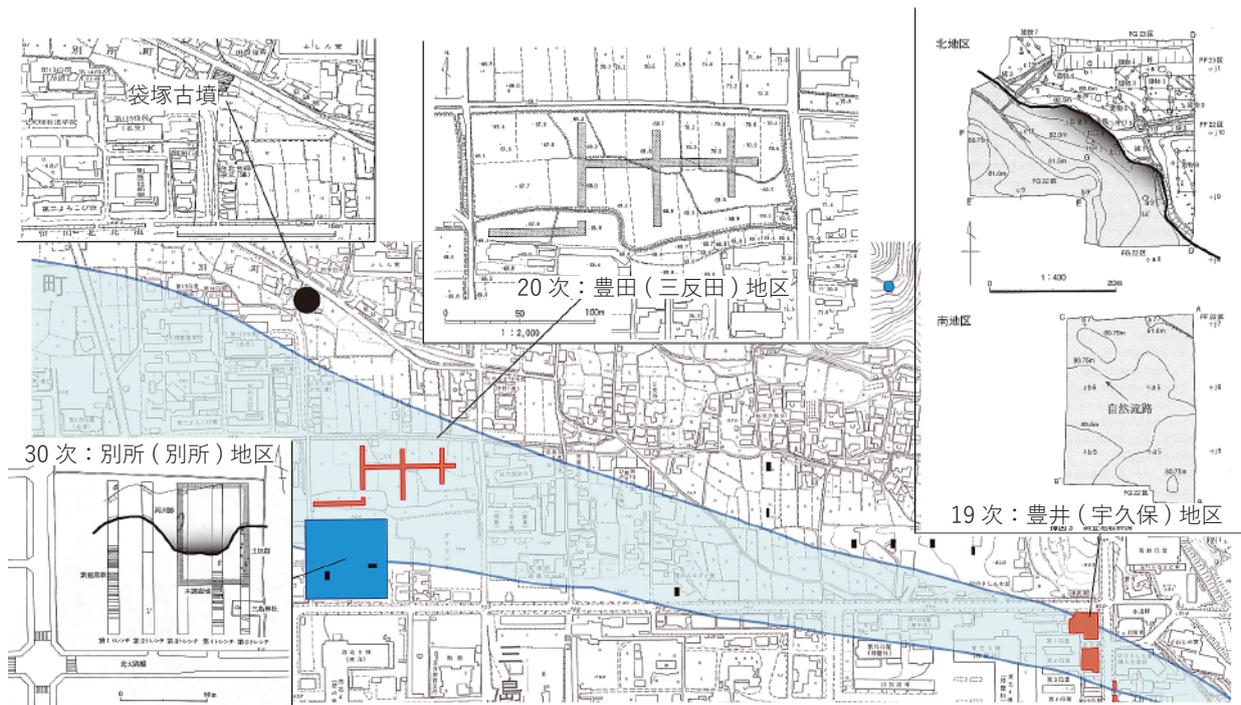


図7 布留川北流復元の成果を得た調査区

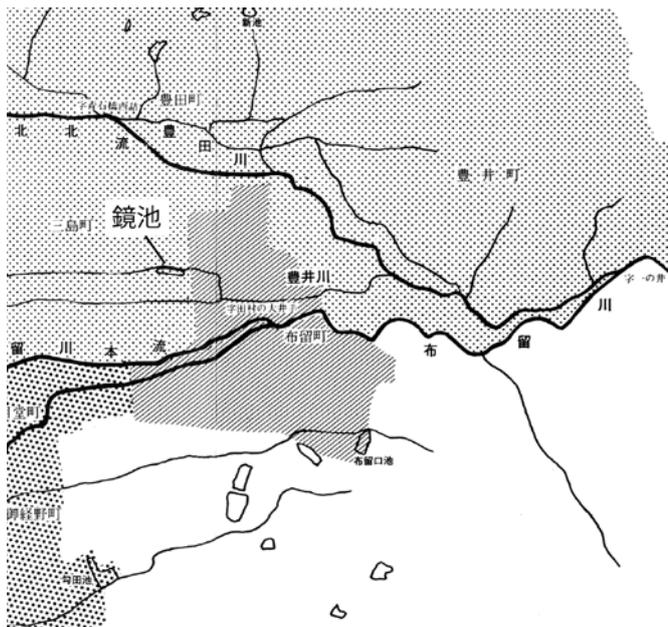


図8 1980年代の布留川水域の河川図  
(西谷ほか 1980)

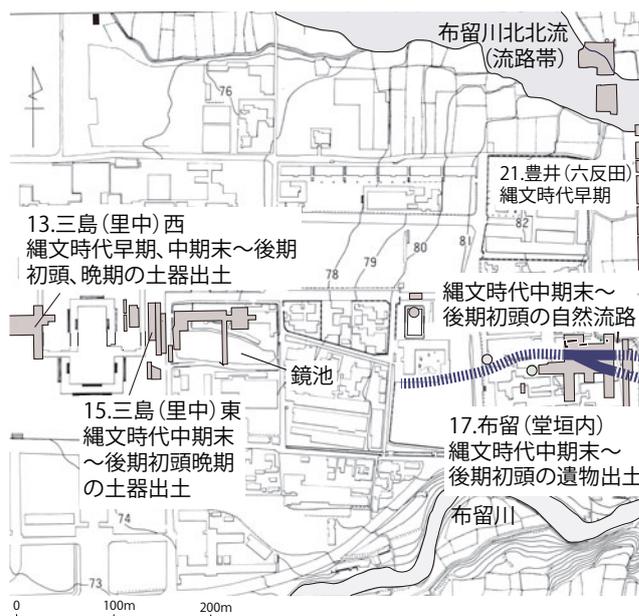


図9 縄文時代の自然流路(地図:近江 1954)

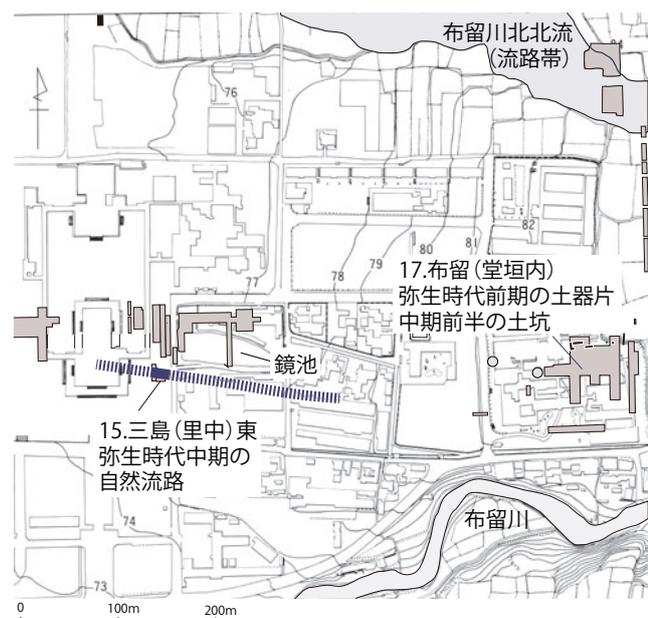


図10 弥生時代の自然流路(地図:近江 1954)

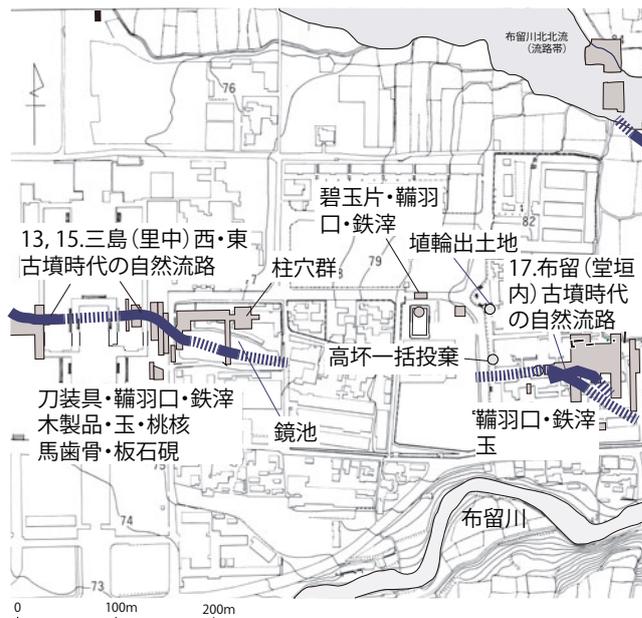


図11 古墳時代の自然流路(地図:近江 1954)

布留(堂垣内)地区から第15次:三島(里中)東地区へ流れる流路が想定されている。豊井(宇久保)地区に準ずるとすれば、北から川岸に投棄された可能性がある。

第6次: 杣之内(山口方)地区(1969年)

布留川の南約700mに位置し、東から延びる2つの尾根に挟まれた小谷の入り口に当たる。調査地点の一つ、4-B区は山口池地点とされる。置田雅昭はこの地点の旧河床及び北岸に堆積した層を5つに分層し、各層に含まれる土器の検討から、この地域の古式土師器の変遷をまとめ、報告している。

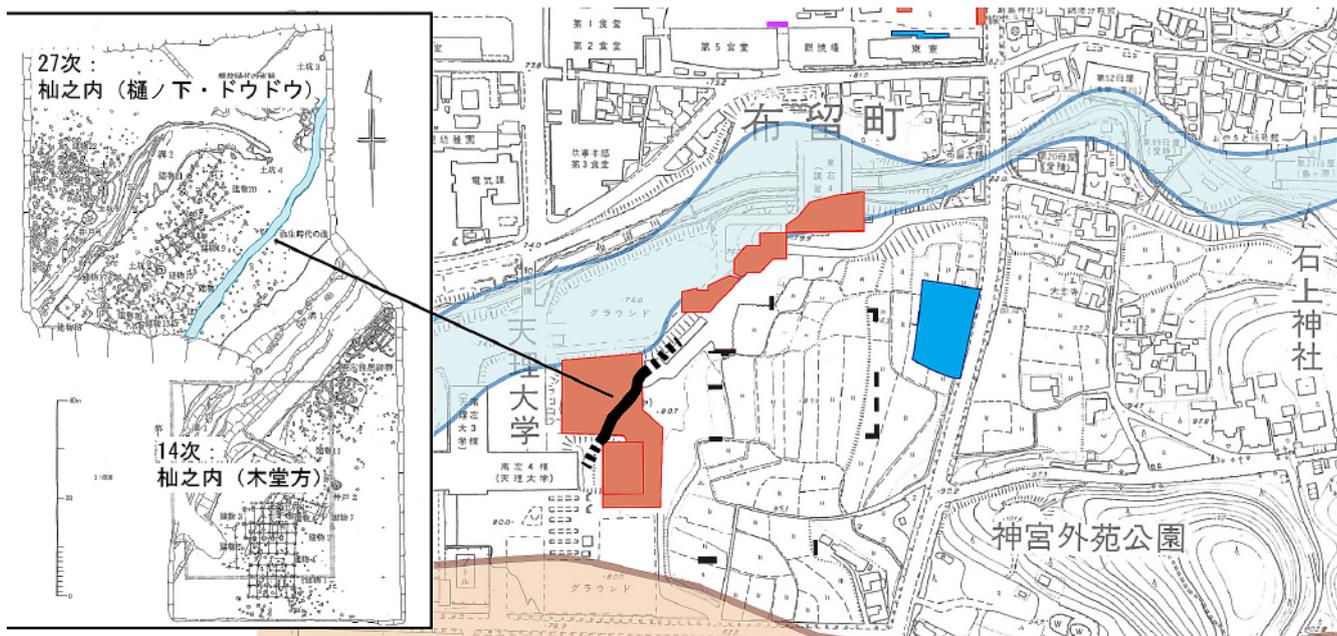


図12 弥生時代後期末の溝の想定ルート

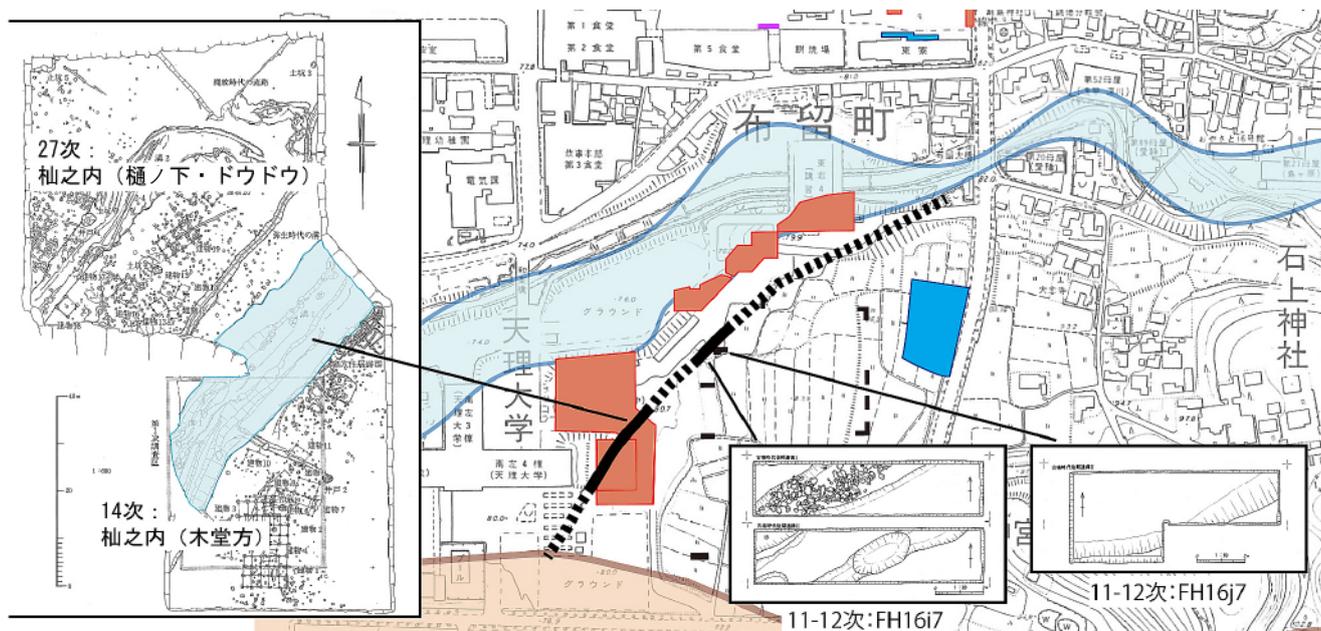


図13 古墳時代大溝の想定ルート

第7次：布留（石田）地区（1971年）

開発に伴う調査で、当初は広い面積が対象だったが、工事によってほとんど破壊され、82㎡のみが調査された。調査の結果、地表下20～50cmまで厚さ20～70cmの砂礫層があり、多量の古墳時代土師器・須恵器・製塩土器が出土した。また、調査区内を南東から北西へ流れる流路が1条検出されている。

第8次：布留（ツク田）地区（1971年）

調査区南半部で若干の遺物が見られたが、遺物包含層はなかった。北半部では砂利層の下に、多量の古墳時代土師器・須恵器を含む灰色砂層があった。その下は砂礫層で、土師器・須恵器・有孔円板・白玉が含まれていた。砂礫中の土器はほとんど摩滅しておらず、当時は浅い流路があり、これらは近辺か



第 11 次：布留遺跡範囲確認調査（1976～78 年）

第 11- 1 次：杣之内（山口方）地区—FH11c3・d3—

範囲確認調査対象地の南端に位置する。杣之内（山口方）地区から南へ 30m の地点。

遺構に伴わないが、弥生時代後期の土器や古墳時代の土器が出土した。平安時代の層では、一辺が 3 間以上に復元できる柱列が検出されている。上層では幅 20～30 cm の溝 7 条が検出され、溝内から土師器燈明皿・同羽釜・瓦器・黒色土器が出土している。

第 11- 2 次：杣之内（木堂方赤坂）地区—F112a8—

東から延びる丘陵から南に派生した独立丘陵の頂部に位置する。近世以降の 2 次堆積層のみで、形象埴輪・須恵器杯・近世磁器が出土している。

後に杣之内（赤坂）地区として、丘陵全域が調査され、円墳からなる古墳群が検出されている。

第 11- 3 次：杣之内（木堂方竹尻）地区—FH13b7—

石上神宮が所在する布留山の南側で、東へ入り込む谷の谷口南側に位置する。調査区北側で、南西に流れる自然流路の北岸が検出された。幅は 4 m 以上ある。流路内では、杭列が流れと直角に 1.3m 以上並んでいた。出土遺物には、土師器・須恵器・羽釜など、古墳時代・鎌倉時代・室町時代のものがあり、その中で古墳時代の土器が多い。本調査区は室町時代までは谷筋で、それ以降、耕地となる。

第 11- 4 次：杣之内（木堂方桧原）地区—FH15b2—

石上神宮の西方で、西に延びる低位段丘の頂部に位置する。遺構は、平安時代の柱穴 2 基と、北北西から南南西に流れる平安時代以降の溝 3 条が検出されている。溝の方向や規模は定まっていない。遺物は柱穴の一基から平瓦の半裁品が出土している。そのほかに、堆積層から瓦器・黒色土器・須恵器高台付杯・提瓶・杯蓋・高杯・土師器甕・同角状把手が出土した。

第 11- 5 次：杣之内（木堂方アゼ倉）地区—FH15j1・F115a1—

石上神宮から西へ延びる低位段丘の南側斜面に位置し、石上神宮からは南西へ約 300m の距離である。

下層の遺構には、古墳時代中期後半から末の柱穴・溝・石敷遺構がある。柱穴は一辺 60～70 cm のものが 8 基あり、一部には礎板や根固め石が残り、柱の抜き取り痕も認められている。これら大型方形柱穴のうち 4 基は方形の位置にあり、一間四方（柱間約 1.7m）の建物が復元されている。遺物は土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

石敷遺構は、幅 1.3～2 m で、東西方向に約 8 m が確認されているが、その先は調査区外へ延びている。この石敷は径 15～20 cm の円礫からなり、南ないし西へ 18 度傾斜する。基底部は、やや大きめの円礫を地山に接して並べる。また、1～2 m の間隔で、基底部の石列に直交して仕切り石を並べ、その間に円礫を充填する。古墳の葺石に似た作業が行われている。遺物は石敷直上及び石敷の間から、古墳時代中期の土師器が出土した。方形土坑の遺物とは型式に差があり、時間差が指摘されている。この石敷遺構を居館の施設とする意見がある。丁寧に造られた遺構で、重要な施設に伴うものと思われるが、性格付けについてはさらなる調査が待たれる。

ほかに、石敷遺構の北及び東側の 8 - B 層の下から、弥生時代後期末の甕破片が数点出土している。

中層の遺構には、古墳時代後期の竈 1 基とそれに伴う土坑 2 基、若干の柱穴が検出されている。竈は上部が削平され、約 10 cm が残るのみである。竈内の中央には支石があり、炭や灰が堆積していた。土坑は径 0.5～1 m の大きさで、土師器甕・杯・甑・小型甕が出土している。

上層の遺構には、平安時代の柱穴が約 80 基あり、多くは径 20～30 cm を測る。出土遺物には、黒色土器・土師器燈明皿・瓦などがある。

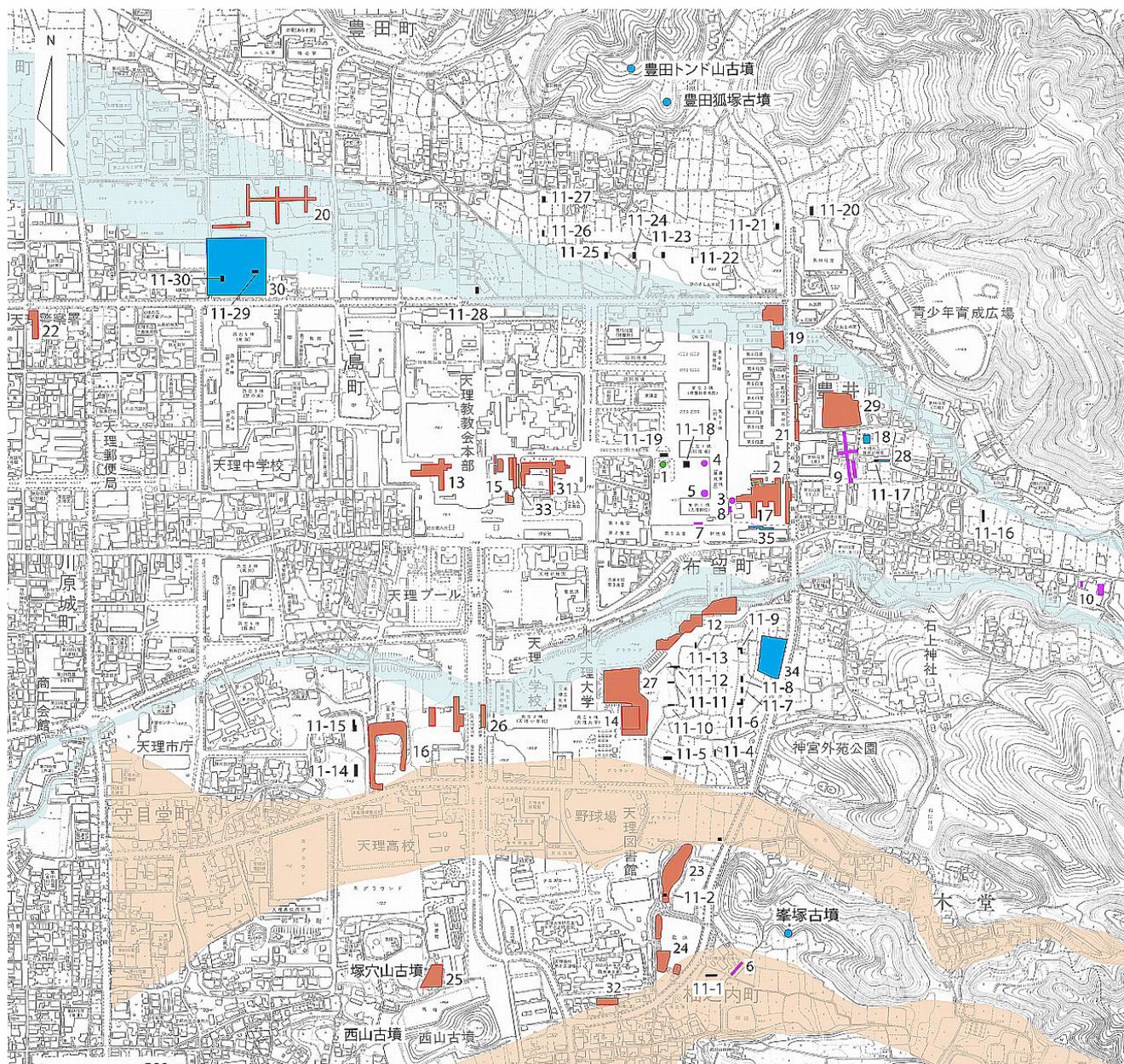


図 15 布留遺跡調査区位置図 (番号は調査回数に対応)

調査区:1. 布留(堂垣内) 2. 布留(堂垣内) 3. 布留(堂垣内) 4. 布留(アラケ) 5. 布留(三反田) 6. 柚之内(山口方) 7. 布留(石田) 8. 布留(ツク田) 9. 豊井(三反ヲサ) 10. 豊井(百田) 11-1. 柚之内(山口方) FH11c3・d3 11-2. 柚之内(木堂方赤坂) FI12a8 11-3. 柚之内(木堂方竹尻) FH13b7 11-4. 柚之内(木堂方椋原) FH15b2 11-5. 柚之内(木堂方アゼ倉) FH15j1・FI15a1区 11-6. 柚之内(木堂方椋原) FG16h1 11-7. 柚之内(木堂方椋原) FG16h3 11-8. 柚之内(木堂方椋原) FG16h5 11-9. 布留(出口) FG16h10 11-10. 布留(大垣内) FH16j1 11-11. 柚之内(木堂方大垣内) FH16j5 11-12. 柚之内(木堂方ハイ上り) FH16i7・j7 11-13. 布留(西小路) FH17f1 11-14. 守目堂(大塚前) FN14e9・e10 11-15. 守目堂(大塚前) FN15e7・e8 11-16. 豊井(カンズクリ) FC19e3・e4 11-17. 豊井(豊井前) FE20d3・d4 11-18. 布留(堂垣内) FH20g3 11-19. 布留(堂垣内) FH20j5・FI20a5 11-20. 豊田(野堂口) FF24e7・e8 11-21. 豊田(野堂口) FG24a5 11-22. 豊田(松塚) FH23f9 11-23. 豊田(松塚) FI23a10 11-24. 豊田(ケヤキ) FI23f10 11-25. 豊田(ケヤキ) FJ23a10 11-26. 豊田(カヨデン) FK24b4 11-27. 豊田(ケヤキ) FK24a10・b10 11-28. 豊田(ナラタ) FL23c4 11-29. 三島(神田) FP23b8 11-30. 三島(神田) FP23h6・h7 12. 布留(西小路) 13. 三島(里中)西 14. 柚之内(木堂方) 15. 三島(里中)東 16. 守目堂(ソルクビ) 17. 布留(堂垣内) 18. 豊井(豊井前) 19. 豊井(宇久保) 20. 豊田(三反田) 21. 豊井(六反切) 22. 三島(木寺) 23. 柚之内(赤坂) 24. 柚之内(北池) 25. 塚穴山古墳 26. 守目堂(鐘子山) 27. 柚之内(樋ノ下・ドウドウ) 28. 豊井(豊井) 29. 豊田(打破り) 30. 別所(別所) 31. 三島(三島神社・鏡池) 32. 柚之内(大東) 33. 三島(サトモト) 34. 布留(上ノ垣内・出口) 35. 布留(堂垣内)

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

最上層の遺構には鎌倉時代の溝・柱穴が検出された。溝は幅が20～30cmで9条ある。別に幅80cmの溝があるが、溝が重複した結果とみられている。出土遺物には、黒色土器・瓦器などがある。

### 第11-6次：杣之内（木堂方桧原）地区—FG16h1—

布留川の南岸にあり、西側へ下がる緩傾斜地上に位置する。石上神宮からは西へ約350mの地点である。

北側で幅約20cmの溝と柱穴約10基が検出され、平安時代から鎌倉時代の遺物が出土している。そのほかに、縄文時代の石匙1点が出土した。

### 第11-7次：杣之内（木堂方桧原）地区—FG16h3—

FG16h1地区より北へ20mに位置する。地山は北側が1m程低い。ここは平安時代以降に、南側の土を削って埋められているが、土には、古墳時代の土師器や須恵器が含まれていた。

遺構は、室町時代の幅約20cmの溝1条と、平安時代の溝5条・柱穴が検出されている。遺物は、室町時代の溝から羽釜が、平安時代の溝からは、黒色土器・土師器甕・高杯が出土している。

### 第11-8次：杣之内（木堂方桧原）地区—FG16h5—

FG16h3地区より北へ20mの地点。地表下2.9mまで掘り下げたが、湧水のため地山は確認されていない。下層には古墳時代後期の土器が含まれ、上層は平安時代から鎌倉時代の遺物が混在していた。

遺物の出土状況とh3区の堆積から、調査区は古墳時代後期まで東から西に延びる小谷だったが、鎌倉時代に埋め立てられたとみられている。

### 第11-9次：布留（出口）地区—FG16h10—

布留川の南約100mにあって、東から西に延びる丘陵の頂部に当たる。地山面で径15～28cmの柱穴が十数基検出された。地山直上の層で、奈良時代から平安時代の土師器や鉄釘などが出土しており、柱穴はこの頃かそれ以前のものと思われる。上層では、鎌倉時代以降とみられる幅10～30cmの溝が検出されている。

### 第11-10次：布留（大垣内）地区—FH16j1—

布留川の南岸約150mに位置し、東から西へ延びる丘陵の北裾部に当たる。

調査区西端の下層で、南東から北西に流れる幅0.8～1.2mの自然流路が検出された。流路内からは古墳時代から奈良時代の土器が出土している。この流路は、FG16h5区の谷から流れ出る水を受けていたとみられている。

その上層は平安時代、鎌倉時代、近世の堆積となっている。近世の堆積層からは鉄釘2点・勾玉1点が出土した。

### 第11-11次：杣之内（木堂方大垣内）地区—FH16j5—

布留川の南岸約100mに位置し、西に傾斜する。

地山上面で、柱穴と溝が検出された。柱穴は西半部に多い。東側の柱穴は少なく、浅いことから、後世に削平を受けたものとみられている。柱穴の平面形は不整形、不整形など形が定まらず、大きさも深さも不揃いである。根固めの円礫が入った柱穴や、柱穴同士が重なるものもある。直線に並ぶ柱穴3基からは、掘立柱建物が1棟復元されている。直交する二辺が調査区外へ延び、全体の規模は不明だが、柱間の長さは各1.2mを測る。この建物の柱穴などから、S字状口縁甕・土師器高杯・甕・須恵器杯蓋など古墳時代中期の土器が出土している。遺構はほかに、古墳時代後期の幅20cmの溝1条、鎌倉時代の幅20～50cmの溝3条があり、すべて南北に延び、北でやや西へ傾いている。

### 第11-12次：杣之内（木堂方ハイ上り）地区—FH16i7・j7—

布留川から南へ約80mの低位段丘に位置し、地形は北西へ傾いている。

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

最下層の遺構には、土坑・溝がある。土坑は北西角にあるが調査区外へ延びるため、全体の規模は不明。確認された長さは2.1m、深さ50cmを測る。遺物には、古墳時代後期の土器・焼けた骨・炭などがある。溝は土坑に隣接し、調査区のほぼ全体で東北東から西南西に傾斜している。幅は約6m、深さ50cmを測る。溝底には窪みがあり、径10cm程の円礫が混ざっていた。出土遺物には、古墳時代後期の土器・製塩土器・白玉・碧玉片・馬歯骨・弥生時代中期の土器片がある。

下層上面では、最下層の溝よりやや北側で同方向の溝が検出されている。幅は約5.5m、深さ30cmを測り、溝底に人頭大の円礫が散在する。遺物は古墳時代後期末から奈良時代の土器・須恵器製の硯・土馬などが出土している。

中層には上から掘り込まれた溝と柱穴がある。溝は下層の溝と同方向に流れ、幅約4m、深さ30cmを測る。溝の底は平坦で、南東では浅くなる。遺物には奈良時代の土器・多量の製塩土器がある。

上層上面では、溝1条・土坑1基が検出されている。溝は幅35cm、深さ25cmで断面U字形を呈する。土坑は長径1.5m、短径1.15mで、深さ35cmを測る。遺物は、共に平安時代後期の土師器・黒色土器が出土している。

最上層上面では、溝・杭列・円礫の集積が検出された。遺物には、平安時代前期の布目瓦がある。

調査区は、杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区の大溝を東へ延ばした延長部分に位置する。このことから、各時代の溝は大溝の一部とみられる。時代と共に再掘削されて場所を変え、規模も小さくなっていったものと考えられる。

### 第11-13次：布留（西小路）地区—FH17f1—

布留川から南へ約120mの地点で、布留川南岸の第二段丘上に位置する。

下層の第5層には円礫が含まれる。第5-B・C層と下がるにつれて礫が大きくなり、径30cm程になる。含まれる遺物には、古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器がある。調査区は布留川の氾濫原で、円礫は氾濫に伴うものとされるが、ここは西の杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区や、FH16i7・j7を流れる大溝の延長に当たることから、これらの円礫は大溝底の堆積とみられる。

### 第11-14次：守目堂（大塚前）地区—FN14e9・e10—

布留川の南岸を東から西へ延びる低位段丘上に位置する。鎌倉時代の円礫が詰まった溝・土坑・柱穴、室町時代の溝・柱穴、江戸時代の暗渠・土坑・柱穴・池が検出された。

### 第11-15次：守目堂（大塚前）地区—FN15e7・e8—

布留川の南岸にあり、東から西へ延びる低位段丘上に位置する。以前は白山神社の境内地だった。

地山面で古墳時代、古墳時代から奈良時代、奈良時代、室町時代の溝・土坑が検出されている。古墳時代の溝は調査区中央やや南にあり、幅は約50cmを測る。古墳時代から奈良時代の溝は調査区の北やや中央寄りにあり、溝幅は50～70cmある。古墳時代の溝と約4m程の距離で平行するように、東から西方向に延びている。

遺物は南側の溝から古墳時代後期の土器・埴輪が、北側の溝から古墳時代から奈良時代の土器が出土している。

柱穴は一辺が50～70cmあり、掘立柱建物が1棟想定されている。遺物には、奈良時代の土器がある。

### 第11-16次：豊井（カンズクリ）地区—FC19e3・e4—

範囲確認調査区の中で最も東端に位置する。布留川に開析された谷口に当たり、南側を布留川、北側を豊井川によって限られた、南北幅130mの低位段丘上である。

地山上面で、弥生時代後期末の竪穴建物・溝・土坑が検出された。

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

竪穴建物は調査区の南端で検出された。建物の北東部分とみられている。その北側では、円弧を描く溝が検出され、径 10m の円形竪穴建物が復元されている。また、一列に並ぶ柱穴から掘立柱建物が 1 棟想定されている。土器は多数出土しており、この地域に居住域があった可能性は高い。

上層は、室町時代の堆積層で、上面には東西方向と南北方向の溝が幾筋か掘り込まれている。遺物には、羽釜・瓦器がある。

ほかに、遺構に伴わないが、縄文土器の底部片と石鏃 1 点、古墳時代から平安時代の土器片がわずかに出土している。

### 第 11-17 次：豊井（豊井前）地区—FE20d3・d4—

布留川の北岸約 200m に位置する。三島川と豊井川の間挟まれた低位段丘上にあり、西に低い地形をなす。

弥生時代後期末の遺構には、幅 1 m 前後で南北方向に延びる溝と、これに直交する幅約 40 cm の溝や柱穴がある。柱穴の一基からは奈良時代の土器が出土している。

上層からは、掘立柱建物 1 棟・土坑・柱穴・溝が検出され、遺構内から平安時代の土器が出土している。

### 第 11-18 次：布留（堂垣内）地区—FH20g3—

布留川の北約 150m に位置する。異形の透し孔を持つ埴輪が出土した※この前に記述なし地点から西へ 30m の地点で、本来は西へわずかに傾斜する地形である。

現代の埋設管掘り方が縦横に巡り、径約 2.5m、深さ 80 cm の土坑が 1 基検出されたにすぎない。中には円礫があったが、遺物は出土していない。埋設管を埋めた土から、古墳時代の土器・鉄釘 1 点・鉄滓 49.6g が出土している。

### 第 11-19 次：布留（堂垣内）地区—FH20j5・FI20a5—

布留川北岸に形成された扇状地に位置し、布留川から北へ約 200m の地点である。第 1 次の布留（堂垣内）地区に隣接する。

最下層で、土坑・柱穴・溝を検出し、掘立柱建物 3 棟が復元されている。土坑は 4 基あり、平面形が不整円形で浅い皿状をなす。径 0.9～1 m、深さ 20～30 cm を測る。最も大きなものは径 1.3m、深さ 30 cm で、中に径 10～15 cm の円礫が散在していた。これらの円礫は底面に接しておらず、埋土内の堆積である。また、土坑・柱穴・溝に切り合いはないが、柱穴同士には切り合うものがある。

遺物は土器のほかに、溝から埴輪片・焼土塊が出土している。調査後、土坑 1 基の埋土が水洗いされ、土器片 160 点・須恵器片 5 点・製塩土器片 36 点・碧玉片 16 点・白玉 1 点・鉄滓 67g が確認された。遺構の時期は、古墳時代中期後半である。碧玉片は 40～50 点程あり、近くに碧玉製玉類の工房跡があったとみられている。また、埴輪・焼土塊・鉄滓の出土から、鍛冶工房の存在も想定されている。

同一面で検出された柱穴に、埋土が灰褐色土のものがあり、これらは出土遺物から奈良から平安時代の遺構とされる。

上層には、土師器・須恵器・碧玉片・砂岩質砥石・製塩土器など古墳時代中期から後期の遺物を含む層があるが、わずかに鎌倉時代の土器も含まれており、鎌倉時代の堆積（第 3 層）とみられる。

鎌倉時代堆積層の上層は北で厚く南が薄くなるが、上面で柱穴・杭列・幅約 20 cm で東西方向と北東から南西方向の 2 方向に分けられる複数の溝が検出されている。埋土には燈明皿・瓦器・黒色土器があり、時期は平安時代から鎌倉時代である。

### 第 11-20 次：豊田（野堂口）地区—FF24e7・e8—

布留川北流の北、中世・豊田氏の居城跡から西に延びる丘陵の先端部に位置する。

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

最下層は平安時代の堆積層で、土師器皿・埴輪片・石鏃1点・サヌカイト片が出土している。

上層(第5層)は鎌倉時代の堆積で、掘立柱建物1棟・土壙墓1基が検出され、さらにその上層(第4層)の江戸時代の堆積では、土壙墓7基が検出されている。

### 第11-21次：豊田(野堂口)地区—FG24a5—

布留川北北流の北約150mに位置し、テラス上の平坦地が西へ段々と下がっている。

最下層(第5層)からは弥生時代後期末の土器が出土しているが、上層の遺構を保護するために掘り込みは行っていない。第5層上面の遺構には、柱穴・溝がある。柱穴からは掘立柱建物が2棟復元されている。1棟は調査区中央にあり、東西2間以上、南北1間を測る。柱穴の平面は方形で、一辺40～60cm、深さ20～45cmを測る。北東角の柱穴を欠落するが、これは上層から大型の土坑が掘り込まれたためである。ほかの1棟は調査区の南端にあり、一辺が確認されている。東西3間以上、南北1間以上が想定されている。各柱穴は平面が不整形で、一辺50～70cm、深さ50cmを測る。柱間は各々132cm、138cm、148cmである。柱穴からは古墳時代後期の土器が出土している。2つの建物は遺物の比較から同時期か、中央部の建物がやや古いとみられている。

上層の第3層では、調査区中央で大型の土坑が検出された。時期は鎌倉時代から室町時代で、東西約3m、南北3.2mの不整形を呈する。出土遺物には、燈明皿・羽釜・瓦器・瀬戸焼・常滑焼・宋銭・砥石・石臼がある。そのほかに、南北1間、東西2間以上の掘立柱建物1棟が復元されている。柱穴には底に扁平な石を据えたものもある。時期は土坑を柱穴が切っており、土坑より新しい。

第3層上面では、室町時代後期の土坑1基、室町時代の柱穴・東西方向に延びる溝1条が検出された。土坑は調査区の北東隅にあり、東西1.5m以上、南北3m以上を測る。柱穴は約100基あり、掘立柱建物1棟が復元されている。

### 第11-22次：豊田(松塚)地区—FH23f9—

布留川北北流の北約60mに位置し、南に開く谷口に所在する。旧地形は南西に傾斜している。

下層で古墳時代中期前半の土坑・柱穴が検出された。柱穴は径15～20cm、深さ5～15cmあり、南北3間以上、東西1間以上の掘立柱建物1棟が復元されている。

上層は古墳時代後期の堆積で、溝2条と土坑・柱穴が検出されている。

### 第11-23次：豊田(松塚)地区—FI23a10—

布留川北北流の北約70mに位置し、南に開く谷口に当たる。旧地形は南西に傾斜し、豊井川から分かれた用水路が北10mを西へ流れる。調査区の南東隅で弥生時代後期末の土坑が検出された。ほかに古墳時代中期の柱穴2基、鎌倉時代の溝3条が検出されている。

### 第11-24次：豊田(ケヤキ)地区—FI23f10—

谷口の西寄りに位置し、西に緩やかに傾斜する。

調査区の中央部で、東西に延びる幅90cm、深さ30cmの溝が検出されている。古墳時代の土師器細片を含む。また、西南隅では長さ1.5mの土坑が検出された。時期は鎌倉時代である。

### 第11-25次：豊田(ケヤキ)地区—FJ23a10—

北から南へ傾斜する谷の西寄りに位置し、南西へ傾斜する。湧水が激しく、地山面は確認されていない。下層の北西隅で土坑が検出されている。規模は長径5m、短径2mで楕円形を呈する。遺物は古墳時代前期の土師器壺と甕が出土した。ほかに調査区を北北西から南南東へ延びる幅約20cmの溝と、北寄りで小礫の集積が検出されている。小礫の隙間からは馬骨・鉄刀子・土師器・須恵器が出土している。溝から出土した遺物はないが堆積状況から、2つの遺構は同じ古墳時代後期とみられている。

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

上層は土師器・瓦器を含む、鎌倉時代の堆積層である。

### 第 11-26 次：豊田（カヨデン）地区—FK24b4—

東から西に延びる豊田山丘陵の南側平坦地に位置し、丘陵の南裾を流れる豊田川と布留川北北流に挟まれている。地形は西及び南に傾斜する。

下層で北東から南西方向に延びる自然流路 2 条が検出された。幅 0.8～1.3m、深さ 30～60 cm を測る。遺物は弥生時代後期の土器と焼けた痕跡のある木片などが出土している。調査区北半の堆積土からは、弥生時代後期末の鉢片が数点出土している。また、この堆積土上面では、南北方向に流れる幅 20～35 cm の溝が 4 条検出された。出土遺物から室町時代とみられる。上層の堆積土には、室町時代の土器に加え、古墳時代から平安時代の土器が含まれている。これは古墳時代以降の堆積層が、室町時代かそれ以前に削平されたためとみられる。

### 第 11-27 次：豊田（ケヤキ）地区—FK24a10・b10—

豊田川の南側に隣接する。周辺の地形は西及び南にわずかに傾斜する。

地山面で掘立柱建物 3 棟・溝 2 条・土坑・柱穴が検出された。掘立柱建物 3 の柱穴は小型の円形または方形を呈し、2 間×2 間が確認されている。柱穴からは弥生時代後期末の土器が出土した。ほかに同時期のものとして、土坑 1 基・溝 1 条がある。土坑の規模は長径 3 m、短径 1.1m、深さ 20 cm で、傾斜が緩く底は船底状を呈している。土坑内からは甕・壺・高杯・甑・鉢がそれぞれ 10 個体出土している。溝は幅 15～25 cm で、弧状を呈する。

掘立柱建物 2 の柱穴は円形か楕円形を呈し、2 間×2 間が確認されている。柱穴からは弥生土器のほかに古墳時代前期の土師器甕・壺・高杯が出土している。

掘立柱建物 1 は大型の方形柱穴が 3 基並ぶことから復元されている。柱穴の規模は一辺 50～80 cm、深さ 30 cm で、柱間は約 2.6m を測る。柱穴内から古墳時代後期の土師器甕・壺・器台・高杯が出土している。

上層は鎌倉時代から室町時代の堆積で、上面で幅 20～30 cm の溝が東西方向に 6 条、南北方向に 2 条検出されている。遺物は室町時代の土器が出土している。

そのほかの遺物として、室町時代の堆積層上面でナイフ形石器 1 点、地山直上で石鏃 1 点が出土している。

### 第 11-28 次：豊田（ナラタ）地区 —FL23c4—

中川に開析されてできた、西に広がる扇状地の中央部に位置する。現在の中川は調査区の北約 120m にある。

床土の下は灰白色と褐色砂の互層で、遺物包含層及び遺構は検出されなかった。一部、地表下 2～2.3m まで掘り下げられたが、湧水のため地山まで達していない。

### 第 11-29 次：三島（神田）地区 —FP23b8—

北約 160m を中川が西流し、この川によって開析された谷の南側微高地に位置する。周辺は緩やかに北西へ傾斜し、南 20m には神田神社が鎮座する。地山確認のため、地表下 1.7m まで掘り下げられたが、湧水のため確認できていない。下層に南東から北西に流れる自然流路があったとみられている。遺構は、柱穴 3 基・杭穴 4 基が検出されている。これらの遺構は古墳時代中期に属する。

上層の堆積層は古墳時代中期の須恵器杯・土師器高杯・碧玉片 3 点を含む。この堆積層上面では鎌倉時代の幅 15～70 cm の溝が東西方向に 11 条以上検出されている。

### 第 11-30 次：三島（神田）地区 —FP23h6・h7—

## 第一章 布留遺跡の概要(上)

範囲確認調査区の最も西側に位置する。北約 160m を中川が西流し、この川によって開析された谷の南側微高地に位置する。周辺は緩やかに北西へ傾斜する。

東西方向に延びる幅 30～80 cm の溝が 13 条検出された。3 条を一単位として 1～1.3m の間隔を持ち、調査区では 3 箇所が確認された。鎌倉時代の燈明皿・瓦器などが出土している。そのほかに、鎌倉時代の堆積土と溝の埋土から、鉄滓が計 13.6g 出土している。付近に鎌倉時代の鉄器工房があったものとみられている。

### 第 12 次：布留（西小路）地区（1976 年）

布留川の南岸沿いで、地形的には第二段丘、及び第三段丘上に位置する。

調査区の長さは約 160m で、東部地域、中央部地域、西部地域の 3 地区からなる。東部地域は古墳時代まで氾濫原で、平安時代に布留川の南岸となる。第三段丘上には鎌倉時代から室町時代の遺物が堆積し、第二段丘には礫層が広がる。礫層には弥生時代後期から古墳時代中期の土器が少量含まれる。上層は鎌倉時代から室町時代の土器を多量に含む。

中央部地域も大部分が古墳時代まで氾濫原で、その後、鎌倉時代から室町時代の遺構が検出されている。川岸に当たる東南部には、古墳時代の溝・柱穴・土坑や、鎌倉時代の柱穴・土坑などが検出されている。

西部地域は比較的安定した場所で、下層に古墳時代の堆積層、上層に鎌倉時代から室町時代の堆積層が広がる。

古墳時代の遺構には、最大幅が約 4 m になる不整形の土坑や柱穴群・溝がある。落ち込みや大型須恵器壺を破碎した場所も検出された。時期は古墳時代中期中頃から後半が中心である。

出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器（初期須恵器含む）・韓式系土器・多量の中世土器・多量の製塩土器・管玉・勾玉・有孔円板・剣形石製品・紡錘車・白玉・ガラス玉・土玉・U 字形鉄製鋤先などがある。

特に土坑から検出された多くの石製品は、祭祀に使用された後、投棄されたものとみられている。